

# AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

# 6

2017

## 特集 農業リスクマネジメント



## 農業リスクマネジメント

### 3 農業リスクマネジメントの新たな展開

池戸 重信

一次産業分野が健全に発展するには六次産業化や輸出の促進が必要だ。食品衛生や食品表示に係る適正なリスクマネジメントの重要性を示す

### 7 リスク管理経営を次の世代に伝える

谷口 威裕

稲作からの事業多角化によりリスクを回避する一方、危機にも直面してきた。局面での対応と、そこから考え出したリスクマネジメント手法を経営者が語る

### 11 成功例目指し植物工場へのリスクに挑戦

木田 久喜

植物工場経営に参入し4年目で単年度黒字を果たした食品会社は、参入リスクと成功可能性についてどう判断し、経営リスクに向き合ってきたのだろうか

#### 情報戦略レポート

### 15 農業景況DI過去最高値を更新 設備投資の意欲も高まり最高に

—2016年下半期 農業景況調査—

#### 経営紹介

#### 変革は人にあり

### 23 有限会社黒富士農場／山梨県 向山 茂徳

ケージ飼い大規模養鶏から放し飼い放牧へ経営転換し、同時にJAS認証の有機飼料づくりに取り組みオーガニック卵を生産する先駆者が、オーガニックの定着について訴える

#### 経営紹介

### 31 有限会社半澤牧場／宮城県 半澤 喜幸

OPU-IVF技術とゲノム解析を利用し、牛群改良による繁殖成績の改善や、優良な和子牛を効率的に生産することを目指す

\*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：山梨 勝弘

静岡県富士市  
2014年初夏撮影

茶摘みを待つ

■茶畑は緑のじゅうたんのよう一面に広がり、幾筋もの畝は美しい模様をつくる■

#### シリーズ・その他

#### 観天望気

雇用型農業の課題 納口 るり子 ..... 2

#### 農と食の邂逅

きぼうのたねカンパニー株式会社／福島県  
菅野 瑞穂  
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) ..... 19

#### フォーラムエッセイ

毎日楽しく食べる幸せ 後藤 恭子 ..... 22

#### 耳よりな話 182

レーザー学者が先導した植物工場  
吉岡 宏 ..... 26

#### まちづくりむらづくり

荒れた山野を再生し花咲き誇る里山を  
子どもたちに残そうじゃないか……  
NPO法人太平山南山麓友の会／栃木県栃木市  
白石 喜一 ..... 27

#### 書評

林 鷹央 編著  
『生きもの調査と里山ハーブで 田んぼソムリエになる!』  
宇根 豊 ..... 30

#### 農林水産省からのお知らせ

農業経営安定化のための新たな収入保険制度 ..... 33

#### インフォメーション

HACCP制度化へ認定業務の勉強会 融資企画部 ..... 35

六次産業化に積極的に取り組む農業者らが参集  
宮崎支店 ..... 35

新規就農者の研修座談会で経営課題に助言  
静岡支店 ..... 35

相互交流を通じ北海道農畜産物の高付加価値化を目指す  
札幌、帯広、北見支店 ..... 35

認定新規就農者の皆さまへ ..... 36

みんなの広場・編集後記 ..... 37

#### ご案内

第12回アグリフードEXPO東京2017 ..... 38

# 望天 観気

## 雇用型農業の課題

現代の社会を構成しているのは組織である。会社、役所、そして大学も組織である。組織は人によって成り立っている。人と人とが互いに協力し合い、足りない能力を補って人的組織として社会的なパフォーマンスを実現する。

農業という産業を担うのは、従来は家族単位の「農家」が主流であった。しかし、近年の動向では人を雇う経営が一定割合ある。

二〇一五年農林業センサスでは、農業経営体一三七万七千のうち、人を雇い入れた実経営体数は三二万四千で、このうち常時雇用者を入れている経営体は五万四千であった。また、農産物販売金額が五千万円を超える農業経営体では、常時雇用導入経営の割合は五〇%を超えており、経営者・役員などよりも常時雇用人数の方が多い雇用型経営となっている。その一方、近年では人手不足が深刻化しており、労働条件が良く働きがいのある職場でないと質の良い雇用者を得ることが難しい状況にある。

これまで農業経営の発展のためには、農地集積、販売管理などが重要とされてきた。しかし現段階では、農地は（地域にもよるが、おおむね）供給が必要を上回り、販売に関するノウハウも蓄積されてきており、次の大きな経営課題の一つとして、人的資源管理の問題が浮上している。

二〇一六年度、私たちは農業法人の調査を行い、人的資源管理をめぐる問題の深刻さを痛感した。すなわち、従業員の早期離職の多さと定着の困難さ、労働条件と処遇の不十分さなどの問題があり、雇用労働力の導入が必ずしも収益性の向上に結び付いていない点が見られたことである。

雇用型大規模農業経営では、収益性確保のために経営を構成する人の在り方を再検討しなければならない。採用・異動・配置などを導入し組織を構成すること、人材開発・人材育成などを訓練し能力を開発すること、評価・報酬・処遇などが活動するよう動機付けること、労働組合・メンタルヘルスの整備などが安心して働けるようにすることなどが雇用型農業法人でも必須となっている。こうした整備は、収益増大の前提条件である。



筑波大学生命環境系 教授

### 納口 りり子

のうぐち りりこ

1957年神奈川県にミカン農家の次女として生まれる。79年北海道大学農学部農業経済学科卒業。同年、農林水産省農業技術研究所研究員。81年より同省北陸農業試験場・農業研究センターで農業経営研究を行う。2000年より筑波大学で研究・教育に携わる。09年より現職。

食べる人たちがいる  
それを励みにする農家  
作る人と食べる人が  
「伝え合う」ことを  
原発事故で学びました

農と食  
の邂逅

菅野 瑞穂 さん

福島県二本松市

きぼうのたねカンパニー株式会社 代表

点在する小規模農地で有機農業を行い、肥沃な土作りで少量多品目の産地化をはかる。一方で農業体験など消費者交流をすすめ、生消費関係を重視する。「3・11」災害から六年目の夏、創造的産地づくりがすすむ。





P19: きぼうのたねカンパニーの代表の傍ら、3.5haで米、トマト、イチゴ、ナス、ピーマンなどを家族と作る P20: 2011年8月から新潟大学と共同研究で徹底した土壌の検査を開始(右上) 「福島の今を知る」ツアーに参加し、作業を手伝う人々(右下) ツアー参加者の8割は女性。「福島がどうなっているのか関心がある」という人が多い(左)

## 就農してわずか二年後に

「地域の人たちが築いた生産基盤を守るには若い人の力が必要。その若い人に農業や農村に関心を向けてもらうには、まず自分が農業をやってみようと思った」――。明確な志を胸に菅野瑞穂さん(二九歳)は、福島県二本松市東和地域で農業を営む実家に戻った。

「両親が営む「あぶくま高原遊雲の里ファーム」は、「大きい田んぼでも一〇㍓」という五〇カ所に点在する棚田で米や野菜を作る。効率とは遠いこの地域でどういう農業を営んでいくかを瑞穂さんの両親を含む東和地域の人々は模索し、有機農業という道を選んだ。約三〇年前から少量多品目生産で、かつ、消費者との交流を大切にしてきた。

両親から「四人兄弟でこの子が一番畑が好き」と言われていた瑞穂さんが、得意なスポーツを極めようと東京の体育大学に進学。「足のバレーボール」といわれるセパタクトローという種目に没頭し、日本代表に選ばれた。卒業後、選手生活に専念する道も考えたが、農業の道を選ぶことを決めた。「両親が東京に送ってくれた野菜は、誰が作ったか分からない野菜とは全く違うもの。顔が見える関係の意味を改めて知りました。食べる人と作る人の関係が薄れる中、両者をつなぐことが生産基盤を守ることに繋がると思っただけです」

就農からわずか一年後の二〇二二年三月一日、東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故が起きた。東和地域は原発から

北西に約五〇キロメートルの所だ。飛散した放射性物質への不安は、人々の心に日ごとに重くのしかかった。それでも瑞穂さんは動いた。浪江町から東和地域に避難してきた人々が身を寄せる体育館に食料品や衣類を届けた。瑞穂さんだけではない。祖母のミツ子さん(七九歳)は、病院の落下物の処理や掃除に、父の正寿さん(五八歳)は行政への対応に追われ、道の駅ふくしま東和の食堂で働く母のまゆみさん(五七歳)は、食料を求めてやって来る人のために一日も休まず食堂に通った。誰もが自分より困難な境遇にある人々のために行動した。

## 不安の中から一歩踏み出す

三月下旬、二本松市には農産物の作付け延期の指示が出た。農作業すらできない日々には耐えきれず、瑞穂さんは知人のいる東京、そして新潟県に向かった。だが一週間で家に戻る。「津波で家が流され、命を絶たれ、職を失った人たちがいる中、自分には田んぼも畑もある。地域のためにできることをやろう」と思った。

放射線量の測定結果により、二本松市の作付け制限は四月二日に解かれ、菅野家では止まっていた農作業を再開した。それでも、瑞穂さんの心には迷いがあつた。「作物は本来、食べる人のことを想いながら作るもの。(放射線量次第で)売れるかどうか、食べてもらえれるかどうか、分らないものを作るのは単なる作業にすぎない。心をどう保て

ばよいのか分からなかった」

そんな不安の中から二歩を踏み出した。希望者を募り、田んぼにヒマワリを植えるイベントを開催したのだ。ブログを通じた呼び掛けに福島県内から約二〇人が参加。皆の表情を見て、瑞穂さんは確信した。「集まって話をするだけでも意味がある」。それ以降、少人数



お蔵からは有機的土壌の棚田が一望できる。父の正寿さん、母のまゆみさんとともに

でも「農家の話を聞きたい」「現場を見たい」という要望に応えるようになった。

### 続ける力と支える人々

震災から二年後、瑞穂さんは遊雲の里ファームとは別に、「きぼうのたねカンパニー」を設立、農業体験交流および農産物販

売を主たる事業に据えた。原発事故以降、福島県農畜産物への信頼は低下した。遊雲の里ファームの米の売り上げは一時、三〜四割まで減った。体験や交流を通じ、自分たちの農業や作物に対する思いの丈を伝える。その繰り返しだが「お客さんを一からつくっていくことにつながる」と感じたのだ。

試練があることは承知の上だ。話す相手に放射能に関する知識が無かったり、たとえ知識があっても価値観が違えば、瑞穂さんが慎重に話す言葉も伝わらない。「若い女性がここ（放射能のリスクがある場所）で農業をして大丈夫か」という声すら聞こえてきたこともある。それでも瑞穂さんは希望する人の受け入れを続けた。その行動を支えたのは、農場を訪ねてくる人が年々増えていったから。そして東和地域の土壌や作物の現状を客観的に伝えられるだけの根拠が持てたからだ。日本有機農業学会の研究者らが定期的に東和地域を訪れ、放射能の実態調査を行ない、「肥沃で腐植の多い粘土質の土壌ほど農産物にセシウムが移行する割合が減少すること」を突き止めた。調査結果は見えない不安を払拭するための大きな支えとなった。

### 大切にしたい持続的な関係

会社設立と同時期、旅行会社の株式会社エイチ・アイ・エスとの連携が始まった。「福島を知る」というスタディツアーの現地担当者として、受け入れ農家の選定や折衝、当日のアテンドを行うようになった。ツアーに

は女性を中心に年間二〇〇〜三〇〇人が参加し、農産物の新たな顧客になった人、東和地域への移住者も現れた。

会社設立当初は、県外の販促イベントに頻繁に出向いたが、現在は県内に重きを置いている。特に子育てをする母親たちとの交流を大切にしている。子どもの健康への影響を考え、福島県産の農産物の購入をためらう動きが母親世代には依然根強い。一方で「理由なく避けるのではなく自分の目で確かめたい」と言う人も出てきた。そうした母親たちと交流を重ねるうち「自分で野菜を作りたい」という声が上がリ、瑞穂さんは今年四月から市民体験農園をスタートさせた。理解し、納得した上で地元の新鮮な農産物を食べる人が増える。その行動に励まされて農家を作る。これこそ作り手と食べ手の持続的な関係だと瑞穂さんは考える。「震災がなければ、どんな農業をしていたか」との問いに「震災がなくとも今と同じように人々と地域をつなげる活動をしていただしようね。でも震災を経験し、伝えたいことがより増えたと思います」。原発事故は、福島県の人々のそれまでの暮らしを一瞬のうちに停止させてしまった。それでも強い想いで時計の針を進める人々がいる。瑞穂さんもその一人。瑞穂さんと出会った人は、おそらく自らにこう問い掛けているだろう。「自分の時計の針をしっかりと前に進めているか」。瑞穂さんと会ってからはずっと考えている。

（青山浩子／文、河野千年／撮影）



# Forum Essay

フォーラムエッセイ

人生とは、面白いものと言いましょか、予知不能と言いましょか、この年齢まで管理栄養士を職業としていることに、私はそう思います。そもそも栄養士には全く興味もなく、ただ自宅から通える大学が栄養短期大学だったので入学した次第。栄養学にもあまり興味がなく、また高校卒業まで家庭で料理をしたこともなくて、お弁当は全て母が作ってくれたものを持参していました。

しかしながら、大学卒業間近になり、このまま花嫁修業するのも嫌だったので、両親を説得して栄養士として就職。職場ではいきなり献立作成、栄養価計算、もちろん現場での調理が待っていました。年配の調理師の方からいろいろと注文を付けられたり、怒られたりの毎日で、栄養士仲間と泣きながら励まし合ったことも一度ならずありました。これらの経験が私に栄養士としての火を付けたのです。絶対一人前の栄養士になるって！理解のある上司やすてきな先輩に恵まれ、次第に仕事への意欲も湧いてくるようになりました。不思議なもので、真面目に真剣に仕事をしていきますと、必ずどこかで誰かが見てくれていたものですね。企業や銀行、工場、保育所、病院などから次々とお声が掛かり、献立作成や栄養指導、栄養士育成など幅広い仕事をしていく中で、「食」は生きることに必要不可欠なものであること、そして生活習慣病は日常の食生活を見直すことで予防ができることなど、栄養士としてやるべきことは多々あるとの想いが募りました。

最大の転機は一九九〇年、体重計で知られる株式会社タニタから、社員の減量を目的に栄養指導をしてほしいとの要請があったことです。肥満者を対象に減量指導を行い、それなりに良い結果も出るようになりました。タニタというブランドもあり、テレビや雑誌などマスコミに出させていただくようになりました。栄養士といいますが、比較的外表には出ない地味な職業でしたので、私にとりましては随分と環境が変わりました。それとともに、長年、栄養や健康について皆さんにお話ししていますので、私自身、健康には随分気を付けています。この年齢になるまで病気はほとんどしたことはありませんし、健康診断でも異常なく元気です。この源は毎日を楽しんで生きて「健康って素晴らしい！」「楽しく食べられることって幸せ」と思っているからではないでしょうか。



管理栄養士  
後藤 恭子

ごとう きょうこ  
株式会社タニタ社員食堂初代管理栄養士。からだ元気！食生活研究所所長、THP産業栄養指導者、Cheerful Givers取締役。栄養指導歴約40年。企業をはじめ病院、銀行などで栄養・健康指導を行い、指導者数は5000人を超える。現在、ダイエット、シニア向け食育・健康などについて全国で講演を行っている。著書に「ひとめでわかる100kcalダイエット」(2017年、文響社)など多数。

## 毎日を楽しく食べる幸せ

## レーザー学者が先導した植物工場

日本政策金融公庫  
テクニカルアドバイザー

吉岡 宏

デ

パートの野菜売り場で、きれいなパッケージデザインのパリ袋に入った小振りのリーフレタスを目にするところがあると思います。パッケージには「すぐに食べられる」とか、「農薬不使用」などの言葉が添えられています。これらの野菜の多くは蛍光灯などの人工光源を用いた植物工場で生産されたものです。

わが国における植物工場の開発は、株式会社日立製作所中央研究所の高辻正基さんたかつしまもとによって始められました。高辻

さんはもともとレーザー研究者であり、アポロ宇宙船が月面に残したレーザー反射装置を用いて、月と地球との距離を測定する最先端の研究を行っていました。

高辻さんに初めてお会いしたのは、野菜試験場に就職して二年目（一九七五年）ごろです。小生が所属していた生理第一研究室に流動研究員として来られ、高橋和彦室長より野菜の生理について情報を収集されていました。この頃に、高辻さんはレーザー研究から植物工場の開発に変わられたと思われます。

植物工場の開発に転換した高辻さんは、一八五年に開催されたつくば科学万博で、バビロンバビロンの「回転式レタス生産工場」を展示しました。また、同じ年に植物工場の小型モデルを「バイオフィーム」という名



植物工場におけるリーフレタス生産

称で、千葉県船橋市のショッピングセンター「ららぽーと」内にあるスーパー「ダイエー」の野菜売り場の奥に設置しましたが、これがわが国における実用的な植物工場の第一号となりました。スーパーでは消費者が植物工場で育つ野菜を見ながら買い物をするなど、当時としては画期的な取り組みでした。

そ

その後、九〇年代の前半から後半にかけて、もう一度植物工場のブームが起りましたが、生産コストの課題を克服できず、下火となりました。

二〇〇八年九月に政府が打ち出した「新経済成長戦略改訂版」の中で、農工商連携の促進がうたわれ、そのシンボルとして植物工場が取り上げられました。そして、植物工場の本格的な実用化と普及拡大を目指す農林水産省と経済産業省の共同のワーキンググループが発足し、その座長に高辻さんが就かれました。

高辻さんの強力なリーダーシップにより、人工光型の植物工場は急速に発展し、光源は蛍光灯からLEDに変わりつつあり、生産効率は飛躍的に向上しています。また、腎臓病患者向けの低カリウムレタスの栽培法が開発されるなど、植物工場は新たな食料生産技術として発展しています。

F



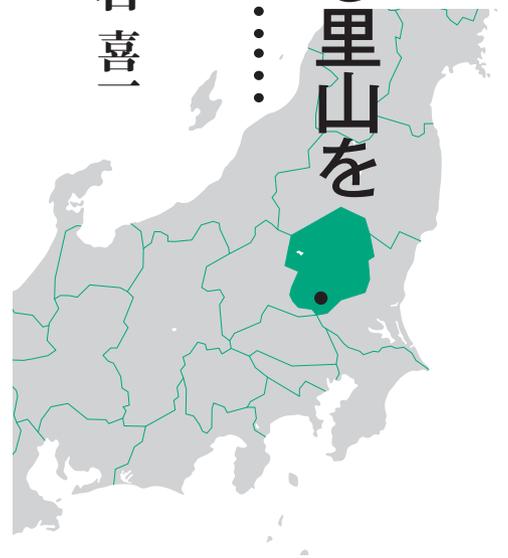
## Profile

よしおか ひろし  
1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科（修士課程）修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、(独)農研機構野菜茶業研究所長、(社)日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士（農業部門）。



# 荒れた山野を再生し花咲き誇る里山を 子どもたちに残そうじゃないか……

栃木県栃木市  
NPO法人 太平山南山麓友の会 理事長 白石喜一



## 来訪者を温かく迎える

「太平山麓の美しい自然を将来に残そう」をスローガンに、私たちは活動を広げてきた。多くの人に来訪してもらったための独自の取り組みは環境美化に始まり、多岐にわたる。

現在、取り組んでいることをいくつか紹介しよう。まず太平山と晃石山の整備活動だ。来訪者が安心して気持ちよく歩けるようにと太平山南山麓ハイキングコースの下草刈り・倒木処理を行い、間伐廃材の丸太を利用した案内標識や山頂標識、山中の休憩用の椅子やテーブルなど設置している。あぜ道に花の球根を植えたり、寺社仏閣の掃除などから始まった活動だが、開始後すぐに、山にトレッキングに来る来訪者を意識したものである。地域は、交通の便に比較的恵まれていることもあり、多くの来訪者は日帰りだった。そこで、トレッキングなどの来訪者を温かく迎え入れるまちづくりをすることで、さらなる来訪者を増や

し、また地区滞在時間も長くできると考えた。

定期的に山に登りイノシシの掘り起こし箇所  
の補修などを行っている。里山整備としては、侵入竹の伐採事業にも取り組んでいる。さらに昨年八月二日の「山の日」には協賛事業として晃石山登頂記念に手作りの木札二五〇枚を用意したところ、不足するほどの人気であった。

トレッキングガイドも行っている。荒れた山野の再生に取り組み、美しい自然を将来に残すためには、山を愛する者でトレッキングのガイドをしようとして、友の会初代理事長の藤野義之（七九歳）が以前勤務していた地元企業の山岳部OBに呼び掛けたところ、地元住民でないにもかかわらず趣旨に賛同してくれて仲間になってくれたのだ。地域を知ってもらうためにと自然や地域の史跡などのガイドを随時行うほか、毎年、秋には「太平山系トレッキング」を実施している。

今年度、これらの取り組みが評価され、森林レク地域美化活動コンクールで農林水産大臣賞を

受賞した。このコンクールは、森林を利用した森林レクリエーション地域において積極的に美化活動を行っている学校や地域グループ、職場グループなどを表彰し、森林レクリエーション事業の振興を図るとともに、森林に対する意識の向上と環境教育の推進に寄与することを目的としたものだ。山の整備活動では、眺望をより良くしようとして大木を切ることもあるのだが、自然破壊につながるのか自然のままが良いのかのなどに来訪者からお叱りを受けることがあり、どう折り合いを付けたらいいかなど悩むこともあるが、受賞は活動の自信につながるものだ。

## 七つの富を賜る技

次に、二〇〇七年から始めている耕作放棄地を利用した「グリーンツーリズム・オーナー制度」がある。太平山麓の大中寺に伝わる七不思議伝説になぞらえて、七つの富をたまわる技を体験してもらおうと「七富賜技体験」と呼んでいる。これは、

profile

白石 喜一 しらいし 喜いち

1948年栃木県日光市生まれ。専修大学経営学部卒業後、神奈川県大磯町の企業に3年間勤務後、大平町(現栃木市大平町)に移住し、商工会で経営指導員や事務局長として39年勤務した。地元で早く溶け込もうと積極的に地元事業に参加、消防団活動(今年3月副団長で退団)、夏祭りのお囃子などの復活にも関与。NPO法人発足時からのメンバー。2015年3代目理事長に就任。地域活性化に向け奮闘中。

NPO法人 太平山南山麓友の会

2007年「美しい自然を将来に残そう」をスローガンに大平町認証第1号として設立。野外活動施設「かかしの里」を拠点に、企業退職者が中心となり活動を行う。平成26年度豊かなむらづくり全国表彰事業「農林水産大臣賞」、第29回森林レクリエーション地域美化活動コンクール「農林水産大臣賞」など受賞。

七つの作目のオーナーとして農業体験と旬の味覚、グリーンツーリズムイベントを楽しんでもらうものだ。今年は四二組に参加していただきたい(原則、二人一組)。地域に来ていただくことが一番大切なので一口、年間二万五〇〇〇円と参加費を抑えている。

現在の品目は、ジャガイモ、サツマイモ、タマネギ、黒大豆、ダイコン、ユズ、ブドウ。一口当たりユズは二キログラム、ブドウが三房で、他の作目は各一畝。農業体験は、例えば、春はサツマイモの植え付け、夏はジャガイモの収穫や黒大豆の種まき、秋はブドウの収穫やダイコンの種まき、冬はダイコンや黒大豆の収穫などで、年間を通してオーナーに地域に来てもらうようにしている。

オーナーは栃木県内の方が多いが、他に東京・



上: トレッキングロードに倒れた木を撤去する  
下: 七富賜技体験で、ブドウの収穫に集まったオーナーら

神奈川・埼玉など他県の方も少なくない。特に子どもたちに農業の楽しさを体験させようと家族での参加が多く、毎回参加者から笑顔がこぼれている。あらかじめ農作業体験日は年間スケジュールで決めていたため、想定したとおり作物が育たず旬に合わせた収穫ができないときなどもあるが、そんな時でも、オーナーは口々に「親戚の家に遊びにきているよう」とか、子どもたちも「楽しい」「また来るね」と言ってくれる。地域はオーナーにとって、心のふるさとようになっていくのだろう。

また、高齢化で耕作ができないでいた地域住民などから自分の畑を無償で使っていいという申し出を多く受けるようになってきた。会の活動を好意的にとらえてのことだ。日常の草取りなど

住民の結び付きが再生

オーナーのほか場管理は友の会が行っている。これがかつての負担なのだが、地域の耕作放棄地が解消され、来訪者が増えることが励みだ。

過去に行っていたイベントも復活した。例えば、四月の「食べよう春、万本桜の会」は、太平山南山麓に咲き誇る山桜を楽しんでもらおうと、行政が過去に開催していたものを復活させたものだ。野セリなど旬の天ぷら・山女魚の塩焼き・地元野菜などを会員が販売している。また、ステージイベントのほか木工教室などの体験コーナーも実施。費用面は、当会の自主財源を充てている。毎回、四〇〇人前後が来場してくれている。「おおひらぶどうまつり」も行政が過去に開催していたものを、

大平町観光ぶどう園協議会と当会が主に実行委員会を組織して復活させたもので、行政は一切関わっていない。

ブドウの早食い競争やビンゴゲームなどのステージイベントをはじめ、マスのつかみ取り・昔遊び・木工体験やぶどう直売・地元野菜直売・飲食の販売など盛りだくさんの内容で実施している。人手の大半は当会で、費用の大半は大平町観光ぶどう園協議会より、と分担をして開催している。毎回三〇〇〇人前後来場するイベントだ。

さらに「初日の出を見る会」は、栃木市より委託管理している公共施設「かかしの里」駐車場から筑波山右側に昇る初日の出を見たり、近くの山頂にある富士山・スカイツリー・筑波山を一望できる三景平からの初日の出を楽しむもので、豚汁など温かいものを提供しおもてなしをしている。

### 薄れゆく山への感謝の気持ち

私たちの住む太平山麓の栃木市大平町西山田地区は繁栄と衰退を繰り返してきた。

太平山は三四一坪の小さな山だが、山頂近くには八二七年に慈覚大師により創建されたといわれる太平山神社が、山麓には江戸時代に上田秋成が著した怪奇読本『雨月物語』の一幕『青頭巾』の舞台であり、また境内にある七不思議伝説も有名な名刹「大中寺」がある。さらに太平山系最高峰の晃石山は麓に下野坂東二六番札所として多くの参観人が訪れる「清水寺」があるなど、どちらも非常に古くから信仰されてきた歴史ある山だ。住民は山を精神的なよりどころとするだけでなく、山の木を燃料やシイタケ栽培の原木に、落ち葉を堆

肥にするなど山からの恵みを受け、山に感謝して心豊かに、伝統とにぎわいの中で暮らしていた。

しかし戦後は、整備が遅れたため徐々に活気が失われていき、いつごろからか町内でも「三大へき地」と呼ばれるほどに衰退してしまった。

だが、一九六〇年代後半から始まった大規模な土地改良事業により広域農道が横断し、ほ場は整備され灌漑設備設置が進むと、それまで細々と栽培されていたブドウが大規模なブドウ団地が形成されるまでになり、ぶどう狩りを楽しむ多くの行楽客が訪れるようになり、大にぎわいとなる。

ところが、バブル崩壊後の九〇年ごろからの景気低迷は客足に直結した。若者は都市部へ働きに出るようになり、西山田地区も過疎化、高齢化の波にのまれ、地域の行事もなくなり、山野は荒れ、伝統は忘れ去られていった。

友の会の現在の取り組みにつながるきっかけはこのころにある。子どもの頃に「三大へき地」を経験していた私たちは地域の衰退ぶりに危機感を抱いた。後の友の会初代理事長、藤野や仲間と私はことあるごとに酒を酌み交わしながら語り合った。

この地に来てくれた嫁が「来て良かったなあ」と思えるような地域にしたい。親の幸せは子に後世を継いでもらおうこと。母親もわかり。そのためにも子どもたちに何か残してやりたい。経済活動に力点が置かれ太平山への感謝が薄れ、住民同士の結び付きも希薄になった昭和の繁栄は私たちには似合わない。私たちらしい誇りを持った繁栄とは何だろうか。私たちの残せるものは何だろうか。有志で地域のために何かしたい。でもいった

い、何ができるのだろうか――。

悶々としていた時、住民が建てた自治公民館が殺風景だということ、私たち有志が庭石の運び入れや桜の植栽を行った。これが、よくできたと周りから大いに褒めていただけだ。これに自信を持った私たちは、四季折々の花が咲き誇る美しい山麓や里山づくりをして太平山南山麓の自然を子どもたちに残そうじゃないか、これならできる！と立ち上がったのである。

二〇〇五年、周辺自治体に呼び掛け、友の会の前身となる「西山田地域活性化研究会」を発足し、「ケガと弁当は自分持ち」の緑化・美化ボランティア活動を意気揚々と開始した。

それから二二年がたち、現在、活動を支えてくれる友の会の会員は、地域住民が四〇人、地域外が二〇人で合計六〇人にも上る。会の活動を理解してくれ、志をともにするメンバーだ。一方で、会員の平均年齢は六八歳と高齢化の波が押し寄せている。今後、一〇年、二〇年先を考えると世代交代の必要性があると感じている。

三〇〇戸の地域住民は美化・整備活動の花植えや掃除など、できることを協力してくれる。自立した会の取り組みが地域全体の共感を得て、自分でできることは自分でやろうという意識が地域に定着してきたのだろう。さらには、活動に参加することは地域を見つめ直すことにつながり住民の結び付きの再生になっている。

今後、友の会では地域農産物を活用したジャムやワインの加工・販売などにも取り組む予定だ。美しい自然と誇りある繁栄を目指す友の会の活動を、ぜひ、応援してください。

『生きものの調査と里山ハーブで

田んぼソムリエになる！』

林鷹央 編著



(安心農業・2,000円 税抜)

まなざしをチェックするための図鑑

宇根豊

(百姓・思想家)

先月九三歳になる隣家の婆ちゃんとお話をしたばかりだった。「むかしは山の田んぼに行くと、女郎花や藤袴がきれいだったよ。今は一本も無か」と目を閉じていた。彼女のまなざしは、もう村の誰も引き継ぐことができない。

この本の、実にきれいな花の写真を追いつながら、先ほどの両種が載っているページで、私はしばらく想いに沈んだ。この本は図鑑と言ってもいいが、単に名前を調べるための図鑑ではない。自分自身のまなざしを見直す効果がある。

まず、田んぼの世界の扉が開く。風景の写真が次々に飛び込んでくる。さらに食べられる生きものにも目が向いていく。えっ、小葱や垣通まで食べられるの？ 食べてみたくなる。

その次は草花のページをめくる。三〇六種と出会おう。もつとも、私の村では見かけないものも

なりある。行ったこともない村には、こんな草も生えていて、人間のまなざしを浴びているのだな、と想ってみる。

それにしても、カラー写真が小さいながらもよく撮れている。田んぼに注ぐ編者のまなざしの強さと豊穡さの反映だろう、と感心する。

次は動物が待っている。牛から始めて鷺になり、蛇、亀、蛙の順にめくると、ここまでで二〇一種だ。写真の説明まで読んでみると、あつという間に二時間がたっている。まあ、一気に読む本ではない。

たしかに、私の村でも野兎や狐を見かけることが、ほんとうに減ってしまった。絶滅の危機の度合いも★の数で表示されている。

さてこれから、魚、貝、そして虫に進む。これだけで二八二種。よくぞ、これほどまでに生きものがあるものだと、あらためて驚く。それでも害虫や蜘蛛はずいぶんと省いている。これは私とのまなざしの違いであろう。

図鑑のページが終わると、著者らのまなざしが披露される。なるほどと、うなずくことばかりだ。田んぼの生きもの調査のやり方も、丁寧に具体的に説明されている。だって、「田んぼソムリエ」になるには、不可欠だからだ。

そして最後が圧巻だ。動物たちの実物大の写真一三三種で幕を閉じる。幼虫と成虫を実際の大きさで比較できる工夫は出色である。『田の虫図鑑』(一九八九年刊)から始まった「ただの虫」の図鑑は、ここまで深化を遂げてきたのだ。

読まれてます 三省堂書店農林水産省売店 (2017年4月1日~4月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 るるぶ 東京の農業 林業 水産業	JTBパブリッシング/編	JTBパブリッシング	860円
2 2025年 日本の農業ビジネス	21世紀政策研究所/編	講談社	800円
3 新版 キーワードで読みとく 現代農業と食料・環境	「農業と経済」編集委員会/監修、小池 恒男、新山 陽子、秋津 元輝/編	昭和堂	2,400円
4 農業と農政の視野/完 論理の力と歴史の重み	生源寺 眞一/著	農林統計出版	1,800円
5 ITと熟練農家の技で稼ぐ AI農業	神成 淳司/著	日経BP社	1,800円
6 日本発「ロボットAI農業」の凄い未来 2020年に激変する国土・GDP・生活	窪田 新之助/著	講談社	840円
7 TPPの真実 壮大な協定をまとめあげた男たち	西川 公也/著	開拓社	2,000円
8 新 明日の農協 歴史と現場から	太田原 高昭/著	農山漁村文化協会	2,500円
9 日本の漁業が崩壊する本当の理由	片野 歩/著	ウェッジ	1,300円
10 図解 知識ゼロからの林業入門	関岡 東生/監修	家の光協会	1,500円

# 農業経営

## 安定化のための

# 新たな収入保険制度

二〇二六年二月、政府の農林水産業・地域の活力創造本部で、農業競争力強化プログラムを決定し、収入保険制度の仕組みの大枠をとりまとめ、一七年三月に、「農業災害補償制度の一部を改正する法律案」を国会に提出しました。  
プログラムと法律案に盛り込まれた収入保険制度の導入の基本的な考え方や制度の仕組みをご説明します。

者へのサービスの向上および効率的な事業執行による農業者の負担軽減の観点から見直しを行うこととしていきます。

収入保険制度においては、個々の農業者の収入を正確に把握する必要があります。そのことから、対象者は青色申告（簡易な方式）を含む）を行い、経営管理を適切に行っている個人・法人の農業者とします。

青色申告を五年間継続している農業者を基本としますが、青色申告の実績が加入申請時に一年分あれば加入できるようにし、補償限度額は青色申告の実績が五年になるまで徐々に引き上げていくなどの措置を設けてスタートすることとしています。

補償の対象となる収入は、農業者が自ら生産した農産物の販売収入全体です。加工品は対象には含まれません。が、精米など所得税法上の農業所得として申告されているものは含まれます。また、補助金も対象には含まれませんが、実態上販売収入と一体的に取り扱われている畑作物の直接支払交付金、甘味資源作物交付金などの数量払いが含まれます。

農業者の収入の把握方法としては、農業者の自己申告により、農産

物の販売金額などを記載した加入申請書などとともに、青色申告書などの税務関係書類を実施主体に提出し、実施主体が提出書類の内容をチェックすることとしています。

対象要因について、収入保険制度では自然災害に加え、価格低下など農業者の経営努力では避けられない収入減少を補償します。従って、捨て作りや意図的な安売りなどは補償の対象外です。

補償の内容については、基準収入の九割（五年以上の青色申告実績がある場合の補償限度額）を下回った場合に、その額の九割（支払率）の補填金を支払います。（図1）。

基準収入は、農業者ごとに過去五年間の平均収入を基本とし、当年の営農計画などを考慮して設定します。

補償限度額および支払率は、農業者が保険料負担を勘案して補償内容を選択できるように、複数の選択肢を設けることとしています。

### 補填は保険・積立の組み合わせ

補填は掛け金が掛け捨てとなる「保険方式」と、掛け金が掛け捨てとならない「積立方式」の組み合わせによることとし、積立方式に加入するかどうかは加入者が選択できます。

### 経営者向けセーフティネット

現行の農業災害補償制度は、①自然災害による収量減少が対象であり、②価格低下などは対象外、対象品目が限定的で、農業経営全体をカバーしていないなど、農業経営全体を一括してカバーするセーフティネットとなっていないといった課題があります。

他方、農業の成長産業化を図るためには、自由な経営判断に基づき

経営の発展に取り組む農業経営者を育成する必要があります。

収入保険制度は、このような農業経営者のセーフティネットとして、自然災害による収量減少だけでなく、価格低下なども含め品目の枠にとられずに、農業経営者ごとの収入全体を見て総合的に対応し得る制度です。

また併せて、農業災害補償制度についても、農業者の減少や高齢化など時代の変化を踏まえて、農業

図1 収入保険制度の補填方式

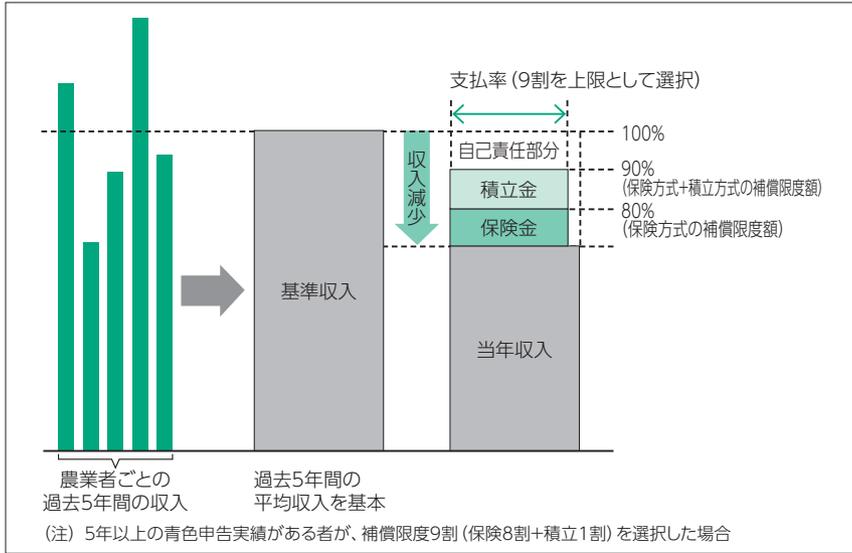


図2 加入・支払いなどの手続きのスケジュール



ける収入の算定期間と一致させるため、個人は一月～二月、法人は各法人が設定する事業年度の一年間とします。

原則として、個人は毎年一〇月～一月までの二カ月間、法人は事業年度の三カ月前～一カ月前までに加入申請を行い、収入算定期間が開始する前までに保険料・積立金を納付します。

収入が減少した場合の補填金の支払いは収入算定期間終了後の確定申告後(個人は翌年三月～六月)となります(図2)。

損害の発生から補填金の支払いまでの間の資金繰りに対応するため、実施主体が簡易な審査など使いやすい融資を実施します。

収入保険制度の実施主体は、全国を区域とする農業共済組合連合会(全国連合会)です。

また、実施主体は、農業者へのサービス向上を図るため、民間損害保険会社と積極的に連携することとしています。

**共済など類似制度は選択加入**

農業共済、収入減少影響緩和対策(ナラシ対策)、野菜価格安定制度など、収入減少を補填する機能を有する類似制度との関係については、収入保険制度とどちらか一方

- 説明動画  
[http://www.maff.go.jp/j/kanbo/nongyo\\_kyousou\\_ryoku/video07.html](http://www.maff.go.jp/j/kanbo/nongyo_kyousou_ryoku/video07.html)
  - 農林水産省経営局公式Facebookページ「農水省・農業経営者net」  
<https://www.facebook.com/nogyokeiei>
  - 問い合わせ先(経営局保険課)  
 〇三ー六七四四ー二七五
- 「収入保険制度の導入」に関する情報
- 農林水産省ホームページ  
[http://www.maff.go.jp/j/keiei/hoken/saigai\\_hosyo/syu\\_nosai/](http://www.maff.go.jp/j/keiei/hoken/saigai_hosyo/syu_nosai/)
  - 農林水産省のホームページでは、以上の内容をまとめた資料や説明動画を公開しております。また、公式Facebookでは、収入保険制度に関する一問一答リレーを行っております。ぜひご覧ください。
- (農林水産省経営局保険課 奥村 万里亜)

## HACCP制度化へ 認定業務の勉強会

今後、HACCP制度化により全ての食品事業者などについてHACCPによる衛生管理の導入が必要となります。

日本公庫は、HACCP支援法に基づく計画認定業務に係る勉強会を農林水産省と共催。食品関係業界団体など指定認定機関一九団体二七人、厚生労働省の担当者が出席し、同法による具体的な支援内容や活用方法について意見交換を行いました。支援法を事業者に分かりやすく説明し、衛生管理を徹底していく必要があるとの認識を共有しました。二月一日、於：東京都千代田区公庫本店（融資企画部）



制度化に向け熱心に勉強し、意見を交換する参加者

## 六次産業化に積極的に取り組む農業者らが参集

農業者や食品製造業者など二九人が参加し、「6次産業化サポートセミナー」を開催しました。

杉野服飾大学産業心理学・新製品開発論講師で6次産業化中央サポートセンターのプランナーを務める越護啓子氏が、スモールメリット（売れていく小さな成功体験）の積み重ねが生産者の所得を増やすとし、取組事例などについて講演、六次産業化におけるブランディングのポイントを解説しました。参加者からは「ブランディングの根源を考え直すことができた」などの感想が寄せられました。二月七日、於：宮崎市（宮崎支店）



ブランディングの大切さを考える参加者

## 新規就農者の研修座談会で 経営課題に助言

独自で農業経営の確立を目指す、静岡県内の新規就農者六人による「新規就農者研修座談会」を遠州信用金庫と共催しました。

講師に新規就農から農業経営を確立した経験を持つ、農業生産法人有限会社グリーンフィールド浜松代表取締役の鈴木雅清氏、惣菜や食品の製造・販売などを手掛ける株式会社知久総務部長の小澤勇夫氏を迎え、新規就農者が抱える生産技術、労務管理などのさまざまな経営課題に対し、自らの体験を交えながら参加者に向けアドバイスしました。二月十七日、於：浜松市（静岡支店）



鈴木氏の説明を熱心に聞く新規就農者

## 相互交流を通じ北海道農畜 産物の高付加価値化を目指す

道内の農林漁業者や食品関連事業者など約二〇〇人が参加し、「第九回農林水産事業交流会」フードネットin北海道」を開催しました。

地域に根差し、函館道南地区のみにハンバーガーチェーンを展開する有限会社ラッキーピエログループ代表取締役社長の王一郎氏が、「地産地消」にこだわり、地域で一番を目指す独自化戦略について講演した他、株式会社太田ファーム代表取締役の高橋真奈美氏が、女性活躍の取り組みを紹介。参加者は、相互連携による新たな事業展開に向けて情報交換を行いました。三月二日、於：札幌市（札幌、帯広、北見支店）



王氏の経営戦略について興味深く耳を傾ける参加者

# 認定新規就農者の皆さまへ 経営の開始を応援します

日本公庫は、新たに農業経営にチャレンジする認定新規就農者が、青年等就農計画を達成するために実施する幅広い事業を融資により支援しています。

青年等就農資金は、認定新規就農者を応援する無利子の資金で、実質的な無担保・無保証人となっています。

経営体育成強化資金は、農地取得などにもご利用いただけます。特に、「農地などの取得」は据置期間と融資限度額に特例が適用されます。2017年度からはこの特例による融資限度額が1,000万円に引き上げられました。

## 資金制度の概要



- \*審査の結果により、ご希望に沿えない場合があります。
- \*上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがあります。
- \*青年等就農資金は毎年度、国の予算の範囲内で実施される制度のため取り扱いに限りがあります。ご融資の実行時期によっては、ご希望に沿えない場合があります。
- \*詳しくは、事業資金相談ダイヤル (0120-154-505) または最寄りの日本政策金融公庫支店農林水産事業までお問い合わせください。

### ホームページのご案内

新規就農に関する融資制度Q&Aや手引きなど、お役立ち情報はこちら



## メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ([https://www.jfc.go.jp/n/service/mail\\_nourin.html](https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html))にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆四月号を通読して、事業の推進には関係者の知恵と志が大切だと感じました。八〇〇号になる「情報戦略レポート」のデータは「聞き取り」を踏まえているといい、信頼度は高いはずですが、また、これまでの記事をほぼ数年ごとにつないだ「特別企画」は、見出しにも日本農業の変遷が感じられ、知識情報としても記念号にふさわしいものになっていきます。さらに「あの時あの人は今」では、知恵を活かした個人や組織の志こそが、苦しい状況を打開していくのだと納得できました。八〇〇号の発刊、誠におめでとつございました。(福岡県太宰府市 平岡豊)

私にとっても大変参考になるものですが、自分の足元を見ると先行きに不安も感じながら経営しています。私のような小さな農業経営者にも希望が持てる記事もご紹介いただけたらうれしいです。(石川県肝沢郡 高橋玲華)

**みんなの広場へのご意見募集**  
本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。「郵送およびFAX先」  
〒〇〇〇〇〇〇四  
東京都千代田区大手町一九一四  
大手町フィナンシャルシティノースタワー  
日本政策金融公庫 農林水産事業本部  
AFCフォーラム編集部  
FAX 〇三三三七〇一三三三五〇

## AFCフォーラム

- 編集  
鳴谷 元 嶋貫 伸二 清村 真仁  
柴崎 勇太 小形 正枝 城間 綾子  
上原 理恵子
- 編集協力  
青木 宏高 牧野 義司
- 発行  
(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部  
Tel. 03(3270)2268  
Fax. 03(3270)2350  
E-mail anjoho@jfc.go.jp  
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>
- 印刷 凸版印刷株式会社
- 販売  
株式会社日本食糧新聞社  
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2  
第一南桜ビル  
Tel. 03(3432)2927  
Fax. 03(3578)9432  
ホームページ  
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>  
お問い合わせフォーム  
[http://info.nissyoku.co.jp/modules/form\\_mail/](http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/)
- 定価 514円(税込)
- ◆ご意見、ご提案をお待ちしております。
- ◆巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

## 編集後記

◆新しい事業に挑戦することは、沼地に足を踏み入れるようなものかもしれない。底なし沼なのか、意外に底が浅く容易に渡れるのか。しかし、この「リスクの沼」に踏み込まないと先んじて成果を得られないことは、谷口農場や木田屋商店の実践教訓です。リスクをいかに読み対策を取るのか、私たち金融機関も覚悟が必要です。(嶋貫)

◆皆さまは誰かの言葉に突き動かされたことがありますか。「変革は人により」の向山さまは、女の子の「二ワトリがかわいそう」のひと言で経営を変える決断をしました。でも、決断に至るまでの向山さまの想いを考えると、とてつもなく深いものを感じます。その決断は自分次第。私はいくつかの言葉を聞き流してきてしまったのでしょうか。(小形)

◆特集、谷口農場では独自技術の堆肥を投入しトマトで二〇年以上連作障害がなく、農と食の邂逅では肥沃で腐植の多い粘土質の土壌ほど農産物にセシウムが移行する割合が減少することが研究者によって突き止められたと知りました。さらには、その仕組みは解明されていないことも多いそうです。土って神秘的なんですね。(城間)

◆小さい頃、祖父に連れられ近所の田んぼをよく散歩しました。するめを付けた糸を棒の端に結んだ、祖父お手製のザリガニ釣りのさおを持って。青々と広がる田んぼのあぜ道にはタンポポやホトケノザ、シロツメクサなどかわいらしい花がたくさん咲いていました。今号の「書評」では、そんな懐かしい光景が思い出されました。(上原)

国産にこだわり農と食をつなぎます。

# 第12回 アグリフードEXPO 東京 2017

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月23<sup>水</sup>日/24<sup>木</sup>日  
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



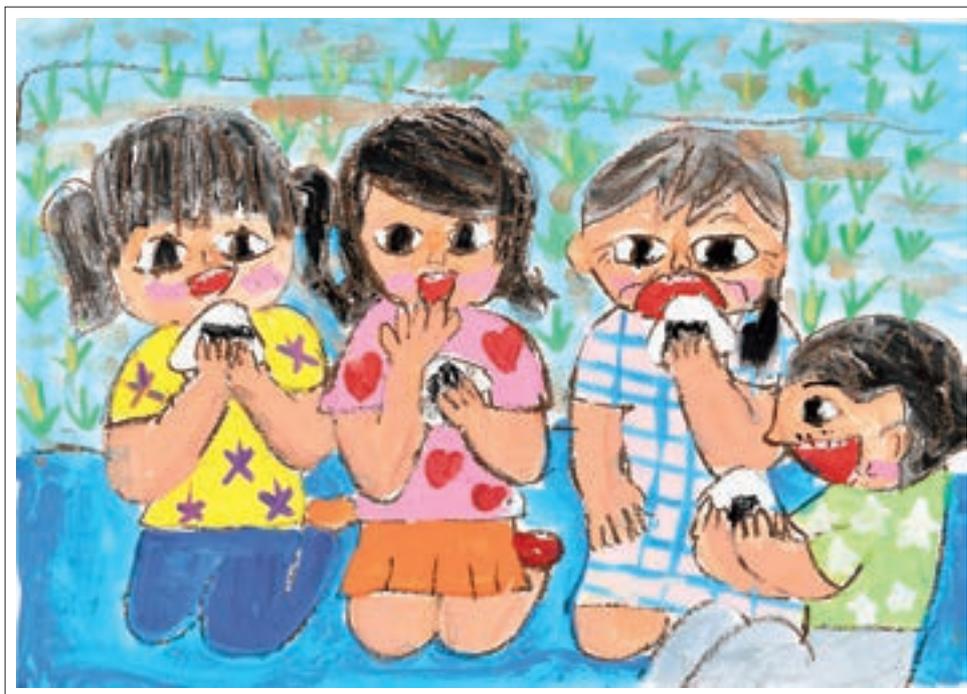
日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東6ホール



農業リスクマネジメント



『おにぎりがおいしいよ』加藤 玲奈 神奈川県海老名市立上星小学校

■AFCフォーラム 平成29年6月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻3号(802号)  
 ■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268  
 ■販売/株式会社日本経済新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南楼7F Tel.03(3432)2927 ■定価514円(本体価格476円)

